

## 現代中国語“也”の相対評価性

武田 みゆき

### 1. はじめに

武田(2004)で、初対面の挨拶の場での発話“认识你,我真高兴”に対する応答として“\*我也真高兴”は非文であることを指摘した。

(1) A:认识你, 我真高兴。

B:\*我也真高兴。

非文になる理由はいくつか存在するが、その一つとして武田(2004)は、相対評価レベルである“也”に絶対評価レベルである“真”が同一文内に共起しにくいことであることを挙げた。ここで「相対評価」とは、ある一定の評価基準が具体的に存在し、その基準をもとに相対的に判断することとし、「絶対評価」とは、具体的な評価基準が存在せず、絶対的に判断することとする。つまり、“也～”により前提事態を受けて当該事態を提示するというのは、前提事態と当該事態との関係を示すことであり、その意味で相対評価レベルの問題である。前提事態“你高兴”が存在するからこそ当該事態“我也高兴”が存在するのであり、“也～”は絶対的なものではない。一方、“真”は程度を表わす副詞とされており、被修飾語である“高兴”に程度の深淺が存在することを示唆するが、それが標準値以上であるという絶対的なものでなければならない。この意味で絶対評価レベルの問題である。

しかし、“也真～”は如何なる条件下にあっても不成立というわけではない。以下の例文をみられたい。

(2) 第二天早上我妈对我说:“你可以去。”真不可思议!但也真高兴!

(インターネット検索による)

[次の朝、母は私に「行ってもいいよ。」と言った。本当に不思議だ!けど本当に嬉しい!]

(3) 要说独眼郝三呢,也真够可伶的。

(《河的子孫》張賢亮)

[独眼郝三のことをいうならば、本当にかわいそうだ。]

例文(2)のように“也”で受ける事態と前提事態の主体が両者とも“我”である場合や、例文(3)のように“也”の前提事態が存在しない婉曲機能<sup>1</sup>の“也”の場合は問題なく成立する。

- (1)' A:认识你, 我真高兴。  
B:我也很高兴。

また、例文(1)のように、“真”と同様に程度を表す副詞とされている“很”を用いた表現が(1)のシチュエーションにおいても問題なく成立することなどから、本来成立しにくいはずの“也真～”が(2)や(3)の如く成立するのは、“也”の相対評価機能と“真”の絶対評価機能の程度(段階性)によるものと考えられる。つまり、(1)では“也”の相対評価機能が強いために“也”と“真”を等レベルにのせることができないが、(2)(3)では“也”の相対評価機能が弱いことによって、等レベルにのせることが可能となるのである。また“我也很高兴”が問題なく成立するのは、“真”とは異なり、この時の“很”には絶対評価機能がないか、あるいは希薄であるからである。

本稿では、これら相対評価機能と絶対評価機能の程度(段階性)による“也真～”という組み合わせ成立の成否を論じ、同時に“也”とその他の文法現象との共起関係にも“也”の相対評価機能が関与していることを論じる。

## 2.“也”の相対評価機能の程度

“也”の相対評価機能には、「前提事態と当該事態との対比の強弱」という程度が存在する。

“也”を含む「X+也+Y」という典型文において“也”のスコープは前方にかかる場合と後方にかかる場合が考えられる。本稿では、前者を「X+也」型とし、後者を「也+Y」型とする。以下、これら両型による“也”の相対評価機能の違い<sup>2</sup>を見ていく。

### 2.1. 「X+也」型

例文(1)は「X+也」型であるが、一般的な“也”の相対評価機能の程度をみるため、ここでは“真”を含まない「X+也」型の例文を挙げる。

- (4)他看了, 我也看了。[彼は見た、私も見た。]  
(5)你去北京参观访问, 我们也去北京参观访问。

[あなたは北京へ参観訪問されますが、私たちも北京参観のため訪問します。]

(6) 来也可以, 不来也可以, 你总得给我个信儿。

[来ても来なくてもいいが、どちらにしても私に連絡してください。]

例文(4)で、後件の“也”で受けている事態の“我”は、前件“他”との対比であり、顕著な主体の対立である。主体には、それぞれ別個の属性が包含されており、「動作・行為」も属性の一つである。つまり主体は、「見る」という動作・行為においては全く別個の個体なのである。この対比はきわめて強いと言え、ここの“也”の相対評価機能も強い<sup>3</sup>といえる。

例文(5)においては“我们”と“你”の対比であり、これも主体の対立である。(4)と同様に“也”の相対評価機能は強い。

例文(6)では、後件の“不来”と前件の“来”との対比である。“不来”と“来”は両極にある事態であり、同時に発生することはなく、しかもこれ以外はないという二者択一の事態で、その対比はやはりきわめて強い。従って“也”の相対評価機能も強い。

以上のように「X+也」型では“也”の相対評価機能は強く、従って絶対評価機能を有する“真”とは同文にのせにくく“也真～”は成立しないこととなる。

以下に(1)と同様非文となる例を挙げる。

(7) A: 我真难过。

B: \*我也真难过。

(8) A: 我真开心。

B: \*我也真开心。

## 2.2. 「也+Y」型

ここでは、「也+Y」型における“也”の相対評価機能の程度を見ていく。前節の「X+也」型と条件を同じくする便宜上、および一般的な“也”の相対評価性をみる目的上、例文(9)(10)は“真”を含まない例である。

(9) 老师讲课, 也提问题。 [先生は説明もするし、質問も出す。]

(10) 我们划船, 也游泳。 [僕たちはボートも漕ぐし、泳ぎもする。]

例文(9)で、後件“也”で受けている事態は“提问题”であり、前件中の“讲课”との

対比である。また例文(10)では“划船”と“游泳”の対比である。これらは両者とも“老师”や“我们”(主体)の動作・行為であり、同一主体が有する属性の一つに含まれている。このような同一主体上のある属性内における対比は、前節の「X+也」型において主体自体が対立しているレベルとは大きくことなることは明らかである。しかし、主体の動作・行為という意味では、例文(6)における“不来”と“来”の対比と同等ではないかということも考えられるが、そうではない。例文(6)での“不来”と“来”では、その焦点は主体が有する属性としてではなく“不来”と“来”という現象にある。これらは同時に生起しうるものではなく、明らかに対極にある事態である。しかし、(9)における“讲课”“提问题”や(10)における“划船”“游泳”は、主体の有する属性の一つとして表現されている。属性の一つである「動作・行為」というカテゴリー内においてはこの他に無数の要素も存在し、対極にある事態とは言えない。しかも場合によっては同時に生起しうる性質のものである。従って、その対比関係は強いとは言えない。

以上のように、「也+Y」型での“也”の相対評価機能は強くなく、絶対評価機能を有する“真”との共起も可能となるのである。以下に“也真～”が成立する「也+Y」型の例文(2)を再録する。

(2) 第二天早上我妈对我说：“你可以去。”真不可思议！但也真高兴！

(2)で後件“也”で受けている事態は“真高兴”であり、これは前件中の“真不可思议”との対比である。両者は“但”によって接続され、その意味は逆接関係にあることを示唆し、対比は一見強いように思われる。しかし、俯瞰してみれば、どちらも同一主体“我”の感情であり、主体が有する属性の一つ(感情)という意味で、前述の例文(9)(10)で「どちらも同一主体のある属性(動作・行為)に含まれる」としたレベルと同等である。よって“也”の相対評価機能は弱く、“也真～”が成立するのである。

### 2.3. 婉曲機能の“也”

ここでは、婉曲を表す“也”の相対評価の程度を見てみる。まず 2.2 節と同様の目的で、“真”を含まない例文(11)(12)を挙げる。

(11) 你也不是外人。我都告诉你呢。

[あなたも外部の人ではないし、あらいざらいお話ししましょう。]

(12) 这张画也还拿得出去。

〔この絵なら、まあ人前に出せる。〕

例文(11)の“也”で受けている事態は“你不是外人”である。これは、例えば“他”“她”などといった架空の人物も“不是外人”であることを前提としている。つまり“你”が“他”や“她”と対立しているのであるが、この前提事態は架空であり実際には存在しない。架空の事態“他不是外人”を想定し、存在する如く“也”で受けることにより、“你不是外人”というような断定表現を避け、語気を緩和した結果、表現を婉曲にしているのである。同様に、例文(12)における“这张画拿得出去”に対する前提事態(例えば“那张画拿得出去”)も架空であり実際には存在しない。

よってここでの対比は弱く、“也”の相対評価機能も弱い。従って絶対評価機能を有する“真”との共起も可能となる。以下に“也真～”が成立する婉曲機能の“也”を含む例文(3)を再録する。

(3) 要说独眼郝三呢,也真够可怜的。

例文(3)における“独眼郝三真够可怜”に対する前提事態(例えば“老张真够可怜”)も架空であり、実際には存在しない。対比対象が架空であり、実際には存在しない分、ここでの対比は「也+Y」型よりさらに弱く、“也”の相対評価機能も極めて弱い。実際、婉曲機能に働く“也”と“真”の共起例は多い。以下この用法の例文をあげておく。

(13) 那东西打湿了多沉啊, 他们丫也真够下工夫的, 二楼三楼都动员了, 四五支竹竿一起干, ……。

(《看上去很美》王朔)

〔それは濡れて相当に重くなっていたが、やつらも全くだんばったものだ。二階も三階もみんな動員し、四五本の竹ざおがいっしょにやり、……。〕

(14) 但立刻又气愤地说：“杉山这个人也真讨厌, 他跟你有什么过不去的, 干什么把你拉上当见证人”

(《证词》松本清张、訳者不明)

〔しかしすぐに怒って言った。「杉山さんも本当に嫌な人ね。あの人があなたに何の恨みがあるっていうの。どうしてあなたを証人にするのかしら。〕

(15) 他那样的条件, 要钱没钱, 要房没房, 娶老婆也真难!

(インターネット検索による)

〔彼のそのような状態では、必要なお金もないし、住む家もなく、嫁をとるのも本当に難しい。〕

### 3. “也”とその他の共起

ここでは“也”の相対評価機能が、“也”とその他の言語現象との共起関係においても否定されるものではないことを見ていく。まず、疑問詞疑問文について、次に比況的表現についてみる。ここでの比況的表現とは、「まるで～のようだ」などの比喻表現の他に、「～みたいだ」「～のようだ」などの表現を文末にもつ「不確実述語」表現も含むものとして扱う。

#### 3.1. “也”と疑問詞疑問文

“也”は疑問詞<sup>4</sup>と共起して疑問文を作りにくい。まず、日本語の「も」と疑問詞との共起関係をみる。

- (16) a. 彼女は誰ですか?  
b\* 彼も誰ですか?

(16b)のように、日本語でも「も」は疑問詞と共起して疑問文になることができない。佐治(1975)は、その理由を「「も」は、「は」と違って主題として提示する機能をもっていないから」であり、「も」を含む当該事態全体が前提事態の叙述部になっている(佐治 1975 筆者要約)としている。この佐治(1975)の「も」についての性質は、中国語の“也”にも並行して考えられる。

- (17) a. 他去哪儿?  
b.\* 你也去哪儿?  
(18) a. 她是谁?  
b.\* 他也是谁?

つまり、例文(17b)で“你”は“也”によって主題として提示されているのではなく、全体で前提事態(17a)の叙述部の働きをしている。しかし、前提事態にあたる(17a)は疑問文であることにより、「前提」にはなり得ないことは明らか<sup>5</sup>であり、従って当該事態(17b)も成立しないこととなる。

同様に(18b)で“他”は“也”によって主題として提示されているのではない。“也”を含む(18b)全体で前提事態(18a)の叙述部の働きをすべきであるが、(18a)は疑問文であり、前提にはなり得ず、従って(18b)も成立しないのである。

このことは、同様に“也”を用いた疑問文でありながらも、諾否疑問文については成立することも反証となる。

- (19) a. 她是学生。 [彼女は学生です。]  
 b. 他也是学生吗? [彼も学生ですか?]

(19b)の前提事態として(19a)が考えられるが、(19a)は疑問文ではなく、問題なく前提となり得、従って(19b)も成立することとなるのである。

これら“也”を含む疑問詞疑問文の非文性を“也”の相対評価性についても見てみる。例文(17b)は、「X+也」型であり、“也”の相対評価機能は強い。一方“哪儿”【どこ】が言語として表現する実態は、空間上のある地点を想定し、それが不定であるため「問いかける」ものであるが、何かを基準として相対的にその地点を問いかけるのではなく、絶対的な場所としての応答を期待するものである。よって相対評価機能の強いここでの“也”と絶対評価を期待する疑問詞“哪儿”は異なるレベルでの評価であり、同一文にのせにくくなるのである。また(18b)も同様で、“谁”【だれ】は、相対評価基準で尋ねているのではなく、絶対的な人物であるかという応答を期待するものであることにより、“也”との共起は成立しにくくなるのである。

これに反して、(19b)も「X+也」型であり“也”の相対評価機能が強いにもかかわらず成立するというのは、“～吗?”で質問しているのは「諾」か「否」かの相対評価による判断を要求しているからである。このことも“也”の相対評価機能が疑問詞疑問文の不成立に関与していることへの反証となる。

また、“哪儿”や“谁”と同様に疑問詞である“为什么”【なぜ】を用いた“为什么+S+也+VP?”は成立するが、これも「“也”が相対評価レベルであり、疑問詞が絶対評価レベルであることにより共起しにくい」とする本稿の主張を否定するものではない。以下にその理由を示す。

- (20) 他去。为什么你也去?  
 [彼が行く(のに/と)、どうしてあなたも行くの?]  
 (20)'(他去。[为什么]你也去?)  
 (20)"为什么你去? [どうしてあなたは行くの?]

例文(20)で“也”で受けている“你去”の前提事態“他去”は、疑問文ではなく、前提として設定し得る。また疑問詞“为什么”は、単に後件“为什么你也去?”の

文上のみにおいて“也”と等レベルにのせられ埋め込まれているのではなく、前提事態“他去”を含めた全体に作用していると考えられる。構造的に示すならば(20)'のようになる。仮に“为什么”を後件のみに作用させるならば、前件との関係は消失し、“也”も不要となり、(20)"のようになる。

以上のように、(20)で“也”が相対評価機能を發揮してはいても、疑問詞“为什么”が“也”と等レベルにのっていないため、両者は衝突しないのである。従って疑問詞を用いた表現であっても(20)は成立し、疑問詞疑問文の不成立に“也”の相対評価機能が関与していることを否定するものではない。

### 3.2. “也”と比況的表現

“也”は、“好像”“似乎”といった比況的表現とよく共起する<sup>6</sup>。

(21) 他的头似乎也埋得更低了。 (中川 1982)

〔彼の頭はますます低く埋まったようだ。〕

(22) 王起明焦急地驾着车, 箭也似地飞在高速公路上。

(《北京人在纽约》曹桂林)

〔王起明は焦って運転していた。高速道路を矢のように飛ばしていた。〕

(23) 杨二嫂发觉了这件事, 自己很以为功; 便拿了那狗气杀(…), 飞也似的跑了, 亏伊装着这么高底的小脚, 竟跑得这样快。

(《故乡》鲁迅, ( )内筆者省略)

〔楊二嫂はこれを見つけたことに手柄顔で、あの犬じらし(…)をつかむと、飛ぶように走って行ってしまった。あの底の高いくつをはいた纏足の足でよくも速く走れたものだ。〕

(24) 颜福南笑说：“在网络文学中, 突然地发口我是站在全世界的中央, 两岸三地的语文教学也似乎能找到共鸣。” (インターネット検索による)

〔顔福南は笑って「ネット文学の中で私は全世界の中央に立っていることを突然発見した。海を挟んで三つの地の語文教学も共鳴を得られたようだ。」と言った。〕

(25) 很快我们就成了无话不谈的好朋友, 林刚也好像变了一个人, 他变得活泼开朗了许多, 他已经完全从失恋的痛苦中走了出来。

(インターネット検索による)

〔我々はすぐに何でも話す親友になった。林剛もまるで人が変わったようだ。随分活発で明るくなり、既に完全に失恋の苦しみから抜け出した。〕

例文(21)～(25)からわかるように、“好像”“似乎”といった比況的表現と共起

する“也”は婉曲機能であることが多い。既に 2.3 節で分析したように、婉曲機能の“也”は、“也”が基本的に設定できる前提事態が架空で実存しないため、“也”の相対評価機能はたいへん弱い。例えば、例文(25)中の“林剛也変了一个人”〔林剛も人が変わった〕は、例えば“老张变了”〔張さんは変わった〕“老李变了”〔李さんは変わった〕などを前提としているのであるが、前提事態“老张变了”“老李变了”は架空の事態であり、具体的に存在するものではない。前提事態が架空で存在しないため、当該事態“林剛变了”は断定しきれず、婉曲表現になる。

一方、“好像”“似乎”といった比況的表現は、「ある対象事態を仮定し、当該事態がそれに近いものとして認める」といった弱い相対評価による表現であり、その本来の性質上、対象の実態は存在しないため断定はできないこととなる。つまり“林刚好像变了一个人”〔林刚は人が変わったようだ〕では、“林刚变了”という事態が消極性を帯びながら存在するということである。これは、ここで“也”の機能にきわめて類似するものである。

従って、比況的表現に婉曲機能の“也”を共起させることは、比況的表現の特徴である「不確定」ムードを顕勢化させるという利点をもつことができ、婉曲機能に働く“也”と“好像”“似乎”といった比況的表現は相性がよく、共起しやすいこととなる。

#### 4. 結語

“也”は本来、前提事態が存在し、それを受けて出現する性質のものであり、前提事態と“也”で受ける当該事態との関係を示すものである。それは“也”が相対評価機能を有することであり、この相対評価機能は“也”によって対比される対象により程度の深淺があることをみた。つまり、その程度は「X+也」型では強く、「也+Y」型では弱く、婉曲機能に働く“也”ではきわめて弱い。

また“也”は疑問詞と共起させて疑問文は成立できず、比況的表現とはよく共起するという現象があるが、ここにも“也”の相対評価機能が関与している。

#### 註

- 1 武田(2004)は、“也”の機能を分類し、婉曲機能はそのうちの一つであるとした。
- 2 張伯江他(1996)に、語順による機能の違い「対比焦点」と「常規焦点」への言及がある。
- 3 楊凱榮(2002)でも前方スコープ型の語順は「要素間の対比を強く意識できる(楊凱榮 2002:173)」としており、本稿で後に言及する後方スコープ型には「対比性はな

い)としている。

- 4 “誰也～” “怎么也～” “哪儿也～”などは不定代名詞であり、ここでの疑問詞にはあたらない。
- 5 相原(1983)も“\*他也来不来?”が成立しない理由として「前提事態“你来不来”は疑問文であるため前提にはなり得ず、類同事項を前提として設定できないため」としている。
- 6 中川(1982)にも、“也”は“好像”“似乎”とよく共起するとの指摘があるが、その理由については言及されていない。

#### 引用文献

- 佐治圭三 1975.「現代語の助詞「も」——主題、叙述(部)、「は」に関して——」『女子大文学』26号 大阪女子大 pp.1-20
- 中川正之 1982.「中国語——とくに「も」に対する一音節副詞をめぐって」『講座日本語学』第11巻 明治書院 pp.142-160
- 相原 茂 1983.「「他也来不来?」はなぜ言えぬ?」『月刊中国語』10月号 内山書店
- 楊 凱榮 2002.「「も」と“也”数量強調における相異を中心に」『対照言語学』東京大学出版会 pp.161-182
- 武田みゆき 2004.「“我也真高兴”の非文性をめぐって」『中国語学と日本語学の視点』白帝社(近刊)
- 張伯江、方梅 1996.《汉语功能语法研究》江西教育出版社